

派遣者番号	R5K20	氏名	長谷川 ちひろ
研究主題	「主体的な学び」につながる児童の姿と教師の支援の一考察		
派遣先大学	東京学芸大学 教職大学院	指導担当者	近藤 正幸
所属	世田谷区立玉川小学校	所属長	依田 哲治

キーワード：主体的な学び、学ぶ意欲、児童の姿、教師の支援、授業改善

要旨：本研究の目的は、「主体的な学び」につながる授業において、児童の学びたいという思いや意欲、学び方に変容が見られる姿、それに伴う教師の支援を「主体的な学びの捉え方」に沿って整理することである。児童、教師の「主体的な学び」の実態を把握するための予備調査、授業者へのインタビュー調査、授業考案、授業分析を行い、得られた結果をもとに「主体的な学び」につながる児童の姿と教師の支援の一例を表に整理した。そこから、あえて介入しすぎない指導、児童の多様なニーズに対応することができる準備、交流の時間の設定等が、児童の「主体的な学び」につながる教師の支援であることが示された。こうした支援が「主体的な学び」につながることを教師が意識することは、児童の学ぶ姿の見取り方や教師の指導力向上に大きく影響すると推察される。また、効果的な教師の支援を具体的に示すことにより、授業改善や意識改善が見られるのではないかと考えられる。

「主体的な学び」につながる児童の姿と教師の支援の一考察

長谷川 ちひろ

1 研究の背景と目的

児童は本来、学びたいという思いで溢れている（稲垣・波多野, 1989; 平野, 1994）。小学校教員を対象にした研究報告にも、現在の子供の特質について、学力低下への危惧は増えているものの、学ぶ意欲は低下していないという意識をもっているという結果が掲載されている（中央教育研究所, 2022）。一方、筆者の所属する公立小学校では、高学年になるにつれ、学校で学ぶことに関心が向きにくくなる、意欲が低下していると判断されるような様子を見せる児童の増加が見受けられる。そこで筆者は、学びたいという思いや意欲が学校で表出しにくい要因を、現場で実際に行っている授業から探り、授業改善に取り組むことが必要ではないかと考えた。学びたいという思いは、文部科学省が提唱する「主体的、対話的で深い学び」の「主体的な学び」の部分に関連する。中央教育審議会答申（2016）において「主体的な学び」の定義は、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる」と示されている。これを受け、平山（2021）は「主体的な学び」について「主体的な学びを構成する五つの要素①興味関心（積極性）、②見通し（計画性）、③自己との関連付け（自覚）、④粘り強さ（自己調整力）、⑤振り返り（意味づけ・共有）が子供たちと教師の間で共有されたうえで、主体的な学びが醸成されていくのを忍耐強く待つ」、「教師は教師としての立場や役割、子供は子どもの側からの立場と役割を果たすことで教育活動の場での学習が成り立つ」と述べている。「主体的な学び」につながる学び方について、児童の実感やその変容を見取ること、授業づくりや授業中における教師のどのような支援が、児童の「主体的な学び」につながっているのかを整理していくことが、授業改善手だてになるのではないかと考えた。本研究では、「主体的な学び」につながる授業を考案・実践し、授業において児童の学びたいという思いや意欲、学び方に変容が見られる姿、また、それに伴う教師の支援を「主体的な学びの捉え方」に沿って整理することを目的とする。

2 研究の方法

児童や教師の「主体的な学び」に関する捉え方や実感を得るために、所属校にて第4、5、6年生児童と教師にアンケートによる予備調査を実施した。その結果を踏まえ、授業者である担任教諭へのインタビュー調査を行った。次に、「主体的な学び」につながる授業考案と、その授業実践記録、使用したワークシートの内容分析を行った。再度担任教師へのインタビュー調査を行い、「主体的な学び」につながる授業における児童の学び方や意欲の変容、それに伴う教師の支援を、本研究で使用した「主体的な学び」の捉え方に沿って整理した。

3 研究の成果

予備調査によるアンケート結果、担任教師に行ったインタビューに対する回答から、学習計画の立て方や振り返りの仕方に児童も教師自身も難しさを感じているという実態が浮き彫りとなった。そこで「学習計画を立てること」「振り返りの明確化」に焦点を当て、光村図書第6学年国語「やまなし」「イーハトーブの夢」の単元において授業を考案した。その授業実践を、児童の学ぶ意欲や関心の変容と教師の支援に焦点をあて分析し、平山（2021）の分類による「主体的な学びの5つの要素」と結び付けながら考察を行った。まず、教師側があえて介入しすぎない支援を行うことが、児童の①興味関心（積極性）を引き出すという

ことが示唆された。また、児童の学習経験を適切に把握し、必要な学習活動を組み込み、②見通し（計画性）をもたせることが①興味関心（積極性）を高めるというつながりが示された。さらに、児童の多様なニーズに対応することができるワークシート等の準備は、児童の「主体的な学び」を支える教師の支援であるということが確認された。自ら選択するという行為は、学び手に学ぶ責任をもたせる。学ぶ責任は、自分で学習計画を立てていくという意欲にもつながる。どう学んでいくかを自分で考えることができるようになると、最後までやり抜きたいという思いが表出してくると考えられる【③自己との関連付け（自覚）、④粘り強さ（自己調整力）】。また、交流の時間は、児童の学ぶ意欲に大きな刺激を与えていることも明らかとなった。児童による振り返りシートの記述を見ても、他者と話すこと、関わることによって、はじめに自分もっていた考えや認識が肯定されたり認められたりする経験や、述べた認識や考えについて自分とは異なる視点からアプローチしている他者の言葉に良い意味で揺さぶられる様子が見られた。さらに、児童と教師の間、児童間において、授業内に交流の意味の共通理解がなされた。この共通理解があるからこそ、何のために交流を行うのかについての理解が促され、主体的な学びへとつながっていくと考えられる【①興味関心（積極性）、②見通し（計画性）、⑤振り返り（意味づけ・共有）】。

4 まとめと課題

本研究では「主体的な学び」につながる授業を考案、実践し、児童の学びたいという思いや意欲、学び方の変容の姿、それに伴う教師の支援を整理した。本研究は国語科の授業実践を基に行っているが、国語科のみならず、各教科においても援用することが可能なものとして示すことができた。しかし、実際に「主体的な学び」につながる授業を考案、実践し、分析を行ったのは1学級のみである。今後、本研究で示すことのできた「主体的な学び」につながる授業改善における手だてを活用した授業を様々な学級で行い、児童の変容や実感を見取ることで、本研究の効果を検証していきたい。また、本研究では一人の教師に焦点を当てインタビュー調査を行ったが、教師によって「主体的な学び」の捉え方や指導の在り方は異なる。本研究で得られた成果に、様々な教師の「主体的な学び」の捉え方や指導法を付け加えていくことが児童への支援や指導をより充実させるために必要であると考えられる。

5 参考文献

- 稲垣佳世子・波多野誼余夫（1989）『人はいかに学ぶか 日常的認知の世界』中公新書、pp.4-20。
- 中央教育審議会（2016）『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』文部科学省、pp.49-50、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf（最終閲覧日：2024年1月31日）。
- 中央教育研究所（2022）『研究報告 No.98 小学校教員の教育観とこれからの学校教育—デジタル化の流れの中で—』中央教育研究所、pp.29-36。
- 平野朝久（1994）『はじめに子どもありき—教育実践の基本—』学芸図書株式会社、pp.3-25、pp.49-63、pp.69-79、pp.100-122。
- 平山達也（2021）「主体的な学びについての一考察」『立命館文學 立命館大学人文学会編』、pp. 82-96。